

横光利一『上海』における五・三〇運動の描写をめぐる

——同時代関係史料との比較をとおして——

李 征

一 はじめに

中国の民族運動として名高い五・三〇事件は、一九二五年（昭和元年）五月三〇日上海の共同租界の警備を任とする工部局巡査による中国民衆の虐殺事件を指すのが通説となっている。しかし、その発端は、事件の二週間前の五月一日、上海にある日本人が経営する内外綿紡績会社の日本人会社員による顧正紅の射殺事件であった。だが、事件の萌芽はさらに遡って、ほぼ三ヵ月前にあたる二月から、上海にある日本人経営の紡績工場で断続的にストライキが起っていたことにある。それがやがて顧正紅射殺事件、五・三〇事件へと展開し、さらに五月三〇日以後になると、罷業（ゼネスト）、罷市（排外運動としての全商店閉鎖）、罷課（学校閉鎖）⁽¹⁾というかたちで拡大していった。現在の中国労働運動史によれば、これら一連の事件の拡大過程を総称して「五・三〇運動」と呼んでいる。

以上の全体像を歴史的視点からみると、そこに三つの歴史的段階がふまえられていることがわかる。つまり、五・三〇事件を画期として、それまでは日本人経営の紡績工場内の労働運動であったのだが、それが反日をスローガンとする上海民衆の暴動事件に拡大し、五・三〇事件以後にはイギリス系警官隊との衝突がきっかけとなって、日本を含めての西欧列強の排外を目的とする民族運動へと深化したととらえられる。このような概要からしても、五・三〇運動は一九二〇年代の上海に居留する日本人と密接にかかわりをもつものであることがわかる。東アジアの国際都市上海を描写する小説『上海』にとって、五・三〇運動が好個の題材であったことはたしかである。したがって、その題材としての幅（射程）は、日本人経営の紡績工場のストライキ、五月三〇日の中国民衆虐殺事件およびそれ以後の罷業、罷市、罷課などの五・三〇

運動のほぼ全過程にわたっている。

本稿では『上海』における題材としての五・三〇運動についての描写と当時の関係史料との比較を試みることにするが、その前提としてテキストの形態をあらかじめとらえておく必要がある。その場合、『上海』というテキストが三次にわたって成立した過程に留意せねばならない。初出のテキストは、主に雑誌連載の形で、一九二八年一月から一九三二年六月まで断続的に書かれたものである（その主体をなすものは、『風呂と銀行』などの五篇である）。この初出テキストの主体部分を改稿・加筆し、あらためて単行本として一九三二年七月に改造社によって出版されたのが、普通、初刊本と呼ばれているテキストである。そしてさらに一九三五年三月、書物展望社によって出版されたテキストは、新たな加筆がなされた、いわゆる決定版である。近年河出書房新社によって出された『定本 横光利一全集』に収められた『上海』は、上記の初刊本を底本とし、決定版などを参照しながら伏せ字を埋め、あるいは誤植などを訂正したものであるが、横光利一の目を通された上記の三つのテキストと性格が違うことを考慮して、ここでは論外にする。

このような成立過程をたどった本作品であるところから、それによってもたらされたテキストの揺れも大きかったことは当然想像できよう。とくに五・三〇運動の描写にかかわるテキストの揺れはいちじるしいものであった。

そこで表題のごときテーマを追究する本稿のとり方は、まず雑誌掲載のテキスト（主に『ある長編』と記された雑誌初出のもの。これを以後「雑誌掲載のテキスト」と呼ぶことにする）から、その五・三〇運動に関する描写を三段階の事件毎にまとめ、それぞれの事件の経過を箇条的に記し、対応する同時代関係史料との比較を試みる。続いてその描写が以後の改稿においてどのように変更されたかを追跡する。こうして『上海』の小説構想の原型とその変遷をたどりながら、作家が題材としての事件を作品構想のなかにどのように位置づけようとしたのかをあきらかにしてみたい。

二 高重の紡績工場（日本人経営の紡績工場）のストライキ事件

『上海』では、五・三〇事件は、主人公参木の恋人の兄である高重という人物が「職工係」（組長）として勤める日本人経営の紡績工場（小説のなかでは「東洋綿糸紡績会社」と設定されている）のストライキから勃発することになっている。ストライキの描写は雑誌掲載のテキストの第二篇「足と正義」第八節にすでに暗示的に語られ、さらに第三篇「掃溜の疑

問」、第五篇「持病と弾丸」からは本格的に取り上げられている。小説におけるストライキの経過をいま箇条的に記述すると、次のようになっている。

1 上海にある日本紡績工場の「職工係」の高重が参木と甲谷に語る話によれば、かれの紡績工場に中国系マルキシズム団体の労働組織「濱中総工会」のオルグが入り、いまや労働争議直前の緊迫した状況にあるという。また中国の紡績労働者は各工場で労働争議を頻発させて、やがては上海に権益をもつ外国企業をすべて上海から排除したいと考えているのではないかということである。

2 上海のある「露地」の酒場で待ち合わせた参木と高重は、職工がストライキを決行しようとしている緊迫状況にある高重の紡績工場の夜業を見回りに行く。

3 職工が「夜業」をしている紡績工場の場面。高重と参木は職工の不穏な動きをそれとなく察知しながら、機械の動く工場内を見回っている。高重は、中国人の職工のリーダーである共産党員の芳秋蘭がこちらに視線を向けているぞと参木に知らせる。そこではじめて芳秋蘭を知った参木は、その美貌に強く魅かれる。

4 高重の工場では、工場の機械を破壊しようとする外部の労働者（工人）が突然侵入して、放火したため、職工たちは大混乱に陥る。芳秋蘭に注意を向けていた参木は、咄嗟に彼女がどうなったのかと気にかかり、職工たちの群が出入口に殺到する混乱のなかで、足に怪我をして倒れていた芳秋蘭を見つけて救い出す。が、参木自身も雑踏のなかで傷つく。

以上は、五・三〇事件直前のストライキの史実に対応する主な小説の場面である。この高重の紡績工場のストライキという構想（1、2、3の部分）が、一九二五年二月以来の日本人経営の紡績工場でのストライキの史実に対応することは、次の史料との比較からわかる。

ア「二月九日、午後三時五十五分、西蘇州路十四号の内外綿第五工場からの電話があった。それによると、同工場ではすでにストライキに入り、罷業の工人たちは今や機械を壊しているところである。巡捕房からすぐ同工場に巡查を派出して、その現場の千五百名の工人に警告をした。（中略）罷業中の労働者は同じ会社の第七、第八、第十二工場の労働者をも誘ってその罷業に同調させようとしたが、日本人に制止された。工場側は巡查の協力によって、罷業者を

工場から追い出した。⁽²⁾」

「二月十日、同じ会社に属する第五工場の約二百人ぐらゐの労働者が、強引に内外綿第九工場に乱入した。かれらは（仕事中の）労働者を威嚇し、かつ家具設備や事務設備および工場の機械を破壊している。当時、（この騒動によつて）千五百人の労働者が工場を離れた。（中略）その後、罷業者はまた労働生路（租界外にある）六十二号の第十三、第十四工場に向かい、その機械を止めて、窓や家具を壊している。（中略）罷業鼓動者の嫌疑を受けて十二名の工人が逮捕された。今度の罷業は（滬西工友会俱樂部）によつて煽られたようである。⁽³⁾」

「二月十一日、ストライキは継続中、第五、第七、第八、第九、第十二、第十三、第十四工場は全部罷業中。第十五工場は正常に仕事中。第三、第四工場は部分的に仕事中。⁽⁴⁾」

イ「二月十五日、豊田紡績株式会社の北極司非而路二百号にある工場は、午後七時半からストライキに入る。この鉄道の交差点から約二百ヤードぐらゐ離れた工場では、夜勤をする女子工員は一四五〇人、男子工員は四〇〇人いるのに対して、日勤の男女工員人数がほぼ同じぐらゐである。それ以外の、機械修理に従事する作業員四五〇人（これも日勤）を合わせて、全体の従業員人数は四九五〇人いる。日本人の工場主から聞いた話によれば、この日の午後七時半頃、極司非而町から来た一群の鼓動者が工場の壁を乗り越えて粗紡の作業場に入り、作業中の労働者に仕事を止めようと呼びかけている。それを聞いて作業を中止して機械を損なう労働者はさらに、他の作業場に行つて、その労働者をもストライキに引き込もうとする。こうして、筒管や梭などは機械から抜けられ、電灯も壊されてしまう状態になる。暫くして、日本人の監督は巡査の協力のもとで、ストライキの労働者を工場から追い出した。これらの労働者は解散もせずそのまま工場の外に集まっている。当時、確かに幾人かの不審な人物がその行列に入っている。ちょうどこの際、工場側の副經理と医者および五人の日本人会社員が車に乗つて玄關のところに着いた。車上の日本人はすぐまわりの群衆に襲われ、うちに一人は胸のところが銃弾に当たつて、傷状がひどいようで篠崎病院に運ばれた。副經理も頭が殴られ、重傷を負っている。もう一人は殴られた後、蘇州河に投げられた。（中略）群衆のなかに白い旗を振っている学生模様の女子も混じっているが、彼女は今度のストライキの主要煽動者の一人であるようだ。⁽⁵⁾」

とあるのがそれである。

この記事は前節で述べた小説構想の3と重なっている部分がかなり多かったと思われるが、特に暴動（ストライキ）に関する具体描写、たとえば工場外の極司非而町から来て、工場の壁を乗り越えて入ったこと、電灯を壊すこと、機械から簡管を抜けることなどは、小説『上海』の細部表現とよく似ていると認められる。次の「日本人が蘇州河に投げられる」という場面と「女性の煽動者が白い旗を振っている」という場面も、『上海』の筋立から容易く読みとれる箇所である（参木が狙撃されて蘇州河に投げる場面、芳秋蘭が群衆を煽る場面）。ただし、ここで指摘しておきたいのは、この事件が内外綿会社の紡績工場のことではなくて、豊田紡績工場で起ったことと記され、また、このような一日中の事件の様相が小説においては、異なる時期に幾つかの場面でみられるというかたちで描かれていることである。

上海にある日本人経営の紡績工場はほんの一部を除いて、主に英米人の管轄権のある「共同租界」に置かれていた。そのために、二月から始まって長期化してきていたこの日本系紡績工場で起ったストライキが、共同租界の行政機構である工部局（主に英米人によって掌握されていた）をかなり悩ませたと思われる。

なおあらかじめいえば、上海における共同租界とは、英米の勢力範囲であり、その最高管理機構を董事会と称する。董事会の執行機構なる工部局の下部には巡捕房などの機構が直轄され、巡査は英米人以外に、インド人や中国人などが雇われていた。上海にあった日本人の居留地も、主にこの共同租界の域内に集中していた。特に虹口地区は「日本人町」と呼ばれていた。この共同租界とは別に、フランスの勢力範囲としてのフランス租界および中国の管轄区としての華界があった。フランス租界の最高権力機関を公董局といったが、内実は英米の共同租界の董事会と大した差異はなかった。その下部機構には同じく巡捕房が設けられ、巡査としてはフランス人以外にベトナム人巡査が雇われていた。西欧人以外、インド人やベトナム人などを雇用することは殖民地（印度やベトナム）の勢力を租界に持ち込んだものといってもよく、一九二〇年代の上海の一つの風景であった。『上海』において（初掲載テキストの第二篇「足と正義」第一節）甲谷と宮子が一緒に歩き回ったその公園の辺りがフランス租界に位置していることは、途中かれらの目に入ったベトナム人巡査の姿からも推定できよう。

ところで、一九二五年のストライキに遭遇して、日本系の紡績工場主は工場の警備のために、従来のどの時期よりも工部局の警備隊を頼らなければならなかった。そのために、ストライキに関する状況を各工場から毎日工部局の警務処に報告するようになっていた。その貴重な記録を残してくれているのがいわゆる『警務日報』^{ひんみ}で、そこにはほとんど日次的に

ストライキ関係記事が記されている。執筆は主に工部局の警務処最高責任者である総巡麦高雲（McEuen, Kenith John）であった。かれは毎日、巡查や工場側からの情報を取聴しながら、随時に『警務日報』に書きこんでいた。この『警務日報』は警務処の覚書であると同時に、工部局の最高責任者（総董）が日常の事務を処理するための参考資料にもされていた。上に引用した三つの資料もこの『警務日報』によったものである（ただし、原文は英語によつて書かれたもので、未刊行の文献資料であったが、これらの文献から五・三〇運動に関わる記事を中国語に翻訳して出されたのは上海檔案館編集『五世運動』第二冊である。本稿における『警務日報』からの引用はすべて、この中国語訳によるものである）。

小説『上海』の題材となるような内外綿紡績会社のストライキ関係記事が『警務日報』には五月に入ってからさらに数多く見えるようになっていく。たとえば、事件の二週間ほど前の五月一日に起った内外綿紡績会社の日本人事務係による職工顧正紅らの射殺事件に関して、小説『上海』においてはただ次のように、一言で触れられているだけである。

この騒ぎのなかで、ゝゝゝ（決定版では「高重ら」）一部の、ゝゝゝ（決定版では「邦人と、工部局属の」）印度人警官の発砲した弾丸は、数人の支那人の負傷者を出したのだ。その中の一人が死ぬと、海港の急進派は一層激しく暴れ出した。

（「持病と弾丸」第八節）

とあって、この事件の起る時間や場所などに関しては、きわめて曖昧で、不明瞭になっている。これに対応する『警務日報』の記載は次のようなものが残されている。

ウ「現在、内外綿紡績会社の八千名近くの労働者が失職中。第七工場の約千名の労働者がみずからの罷業によつて失職したのであるが、通常この第七工場から供給されていた原料が中断されたため、第十二工場も千名ぐらいの労働者が失職してしまつた。さらに上記の両工場からの原料がなくなつたため、第五工場の東・西両工場および第八工場も止まっている状態にある。工場側は、第七工場と第十二工場が五月十五日（日曜日）まで休業すること、且つ第十二工場の職工だけに休業期間中の給料として平日の半分ぐらいの賃金を支給することを告示したにもかかわらず、両工場の労働者はまた例のとおり五時半に来て夜業をするつもりである。工場の玄関に立っている三人のインド人巡査およ

び十五人の日本人会社員に阻止されて、仕事ができなくなった労働者は、強行して（第十二）工場に乱入し、さらに第七工場に入った。そこで何人かの労働者が棍棒と他の武器を取ると、まもなく、労働者は日本人と衝突を起こした。日本人が人数の少なさをおそれて、すぐ拳銃を出して撃った。七人の労働者が負傷したが、その他の群衆は第五工場に逃げた。そこに入った労働者は仕事中の労働者たちと一緒に、日本人の監督によって閉鎖された。その後、工場側は工部局の巡捕房に救援を求め、その要請によって到着した増援の巡査隊は銃を撃って騒動中の群衆を工場から追い出した。（中略）負傷者の中の一人顧正紅の症状はひどかった。」

「負傷者の一人顧正紅は負傷が悪化して死亡。（中略）五月十六日午後、閘北潭子湾工友俱樂部が罷業中の労働者を援助する会議を開いて、次の決議を審議した。

一、最初に労働者に発砲した二人の日本人元木と川村を除名捜査すること。（以下略）」

この三つの記事（ア・イ・ウ）を総合してみると、その輪郭はほぼ小説に描かれた高重の紡績工場ストライキの場面对応するものとなる。それをあらためてたどっておくと、まずこの史料の（ア）によれば、ストライキ中の内外綿紡績会社の工場に「同じ会社の」別の工場に勤務する「労働者が強行に乱入した」。かれらは暴徒と化し、工場の機械類を破壊して廻った。また（イ）によると、同じ日本人経営の豊田紡績会社の工場にも外部から鼓動者が乱入して争議を煽ったことが見えた。ただし、工場放火といった過激な事態は、『警務日報』によれば、（ウ）のように五月の事件とされているが、のちにふれる『支那労働問題』においては、上海にある他の日本系紡績工場——豊田紡績会社および日華紡浦東会社の工場——で起ったと記録されている⁸。

一九二五年の統計によれば、当時上海にあった日本紡績工場は二〇〇社ぐらいあった。そのうち、五・三〇運動に巻き込まれた会社としては、まずなんといっても内外綿紡績会社があげられる。この会社は一五箇所の工場によって構成されていたが、そのうち、本社と考えられる第一、二工場が日本の本土にあり（大阪）、第三、四、五（東・西）、七、八、九（紡・織）、十二、十三、十四、十五などの十箇所（第五、第九工場は分業化されて、さらにそれぞれ東・西、あるいは紡・織の二工場に分けられていた）の工場が上海にあった。残る第六、十、十一工場が山東省青島市に置かれていた。一九二五年に、上海の内外綿紡績工場で起ったストライキがまず最初に青島に波及したのも、同じ会社の工場であつたからであつ

た⁹。

この内外綿紡績工場以外にも、上海にある日本人経営の紡績工場として知られていたのが、豊田紡績工場と同興紡績工場などであった。それらの工場でも、ほとんど同時にストライキが起ったのだが、本稿第六節でふれる暴徒化した中国人労働者によって日本人が蘇州河に投げられる事件（『海港章』で、参木が泥溝に投げられてしまう場面を連想させる）も、最初に豊田工場で起っているのである。

三 中国共産党員芳秋蘭のデフォルメ造型

『上海』のなかに五・三〇事件（運動）を題材として取り込むために、作家横光利一が採った方法として次の三点が目される。すなわち、第一には作中人物の關係する紡績工場を事件勃発の発端とすることであった。この方法がすでに高重の紡績工場のストライキから事件描写を始めているところに見い出せた。そしてそれによって、第二として、拡大してゆく事件の経過をできるだけ作中人物の視点からとらえさせるといふ方法が指摘できる。そのためであろうか、まず主人公参木を紡績工場の組長高重と関わらせて一人の社員として紡績工場に入らせる（事件の箇条的経過でいえば、前節であげた2、3にあたる）。これによって小説の登場人物、とりわけ参木をこの小説中の視点人物とされるが、そのような人物を紡績工場に入らせることによって、小説は五・三〇運動を見る「眼」を確保させた。こうして視点人物参木の眼は一種のカメラ・アイとして機能することになるわけである。方法の第三点としては、たんに視点人物としてではなく、主要な作中人物を事件の渦中に巻き込ませることであった。ただ事件の性質上、表面的展開の主役は、中国人の労働者と学生であり、また租界地の警備の外国人（共同租界では、主にイギリス人とインド人）警官隊といったマスとしての集団であった。そこで作家は、中国人労働者を影で指導する中国共産党員芳秋蘭なる女性を登場させた。彼女は一方で事件を煽動するとともに、もう一方で、参木とかかわらせることで、参木を事件の渦中に巻き込んでいく。

この芳秋蘭の造型が雑誌掲載のテキストから決定版にかけて大きく推移している。本節からその推移を跡づけることで、小説『上海』において共産党員芳秋蘭がどのように描写されているのかをあきらかにしてゆきたい。このことは作品執筆時点における作者がひるがえって、日本共産党とその運動をどう見ていたのかという点にもかかわってくるので、二つの

問題をあわせて検証することにする。

まず雑誌掲載のテキストの芳秋蘭の造型と役割をみてゆこう。五・三〇事件と密接に関わる人物芳秋蘭については、雑誌掲載のテキストが第二節「足と正義」の第四節のところで、はじめて高重によって彼女の存在を参木に告げられた。既述の箇所だが、あらためて引用しておこう。

1 ある人物に気づいた高重は参木に中国人の職工たちのリーダーである共産黨員芳秋蘭がこちらに視線を向けていると知らせる。参木は芳秋蘭の美貌に強く惹かれると同時に、世界経済に巻き込まれている日本と中国の経済関係に思いを馳せる。

やがて工場には外部から暴徒が乱入してくる。そこで以下、箇条的に芳秋蘭に関わる叙述をたどってみる。

2 すると突然、工場に外部から「暴徒」が侵入し、工場に放火したために、職工たちは大混乱に陥る。芳秋蘭に注意を向けていた参木は、咄嗟に彼女がどうなったのかと気にかかり、職工たちの群が出口に殺到する混乱のなかで、足に怪我をして倒れていた芳秋蘭を見つけて救い出す。が、参木自身も雑踏のなかで傷つく。〔掃溜の疑問〕第二節〕

3 支那街（上海の中国人居住地区）にある芳秋蘭の部屋の場面。昨夜の混乱のなかで、参木は芳秋蘭を救いだし病院へ連れてゆき、そのあと、芳秋蘭の部屋まで送ると気を失ってしまう。翌朝ふと眠りから覚めると、参木は芳秋蘭の隣室で寝ている自分を見出した。〔掃溜の疑問〕第三節〕

4 一夜明けて、芳秋蘭と朝食をとるために外出する。参木は芳秋蘭の魅力に心がときめくを感じた。しかし、彼女と会話を交わすうちに、彼女が自分とは別個の世界の人であることを悟っている。〔掃溜の疑問〕第三節〕

芳秋蘭はまずその美貌によって参木を惹きつける。そのために参木は最初恋愛感情から彼女に近づこうとする。しかし、4にみるように、彼女との会話はほとんど中国におけるマルキシズムの問題であり、また参木の内なる「東洋主義」への芳秋蘭からの攻撃に終始する。それらの内容は、現代からすれば、なんら新鮮な印象を覚えさせられない定型的思想の開陳といったところで、ここに引用するまでもあるまい。

彼女と別れた後の参木は、あらためて芳秋蘭との関係を反省する。

5 甲谷を待っている間、参木はさきほどのお杉へのさまざまな思いが静まってくるのと反比例するかのようになり、昨夜工場で見かけた美貌の革命家芳秋蘭に魅了されたそのときの印象が鮮やかに心に蘇ってくるのを感じた。と同時に、二

人の間を隔てるものは、それぞれの国家と民族であり、また個人の思想と主義の差異であつたことも気づかれている。

〔持病と弾丸〕第二節

そして次に参木が芳秋蘭を見つけるのは五・三〇事件の暴動の真只中であつた。ゼネストの状況の視察を命ぜられた参木は、とあるビルの凹んだ入口のところに陣取る。

6 参木はその窓ガラスに垂れ下がって映っている群衆の中から、芳秋蘭を捜し続けていた。二人はやつと出会つたが、群衆の雑踏に紛れてまた離ればなれになつてしまった。

〔持病と弾丸〕第九節

7 警官の発砲によつて、群衆はビルの影に四散して逃げ込み、街路には死者と負傷者が倒れている以外には、人影も消え、一瞬の静寂が漲つた。参木は、そんな街路の真中へと「死の魅力」にとりつかれたように歩み出した。すると、群衆の中からすつと現れた芳秋蘭に腕をつかまれ、「早く逃げるように」と声をかけられ、近くのホテルへ芳秋蘭に連れられて入つた。ホテルの一室で参木は芳秋蘭から先日、彼女を救い出したことへのお礼を言われる。

〔持病と弾丸〕第九節

8 その後、二人してホテルの部屋の窓からデモの惨状を眺めながら、参木は芳秋蘭から上海市民の憎しみが日本の紡績工場から、印度人警官隊に発砲を命じた英国官憲に向けられることを告げられた。

〔持病と弾丸〕第九節

そして二人は別れる。雑誌掲載のテキストでは二人の出会いはこので途切れる。いま一度芳秋蘭の名が出るのは参木の心の内であつた。事件の翌日になつて事態の收拾策がさまざまにはかられる。その一つとして小説では次のように記されている。

9 工部局の特別納税会議において、外国居留民代表と中国商人団の間に激論が交わされていたが、群衆の眩きから中国人が勝つたとわかつて、参木はその背後で争議を指導している芳秋蘭の誇らしげな笑顔を感じた。五・三〇事件の暴動が起つて以来、参木はずつと彼女に会つていなかったにもかかわらず、彼女がきつと群衆のどこかに活躍していることを直感していた。

〔海港章〕第四節

以上が雑誌掲載のテキストに登場する芳秋蘭のすべてであるが、彼女が共産黨員であるにもかかわらず、貴婦人らしく描写されている。たとえば、芳秋蘭の部屋の壁には「緞帳」が掛かり、「紫檀の椅子」が置かれている。そんな部屋のかかに住む芳秋蘭は繊細さに満ち、「古風な水色の皮襖（オーバー）」に身を包み、耳には「耳環」（イヤリング）をつけて

いた。芳秋蘭の不自然さはこればかりではない。作品中で繰り返し強調される彼女の「耳環」や「紫檀の椅子」や「古風な水色の皮襖」など以外に、彼女の登場する環境もつねに「翡翠」と「象牙」などが溢れている街のどこかに置かれている。これらの描写からみて、彼女の住まいは古風な中国の面影がいまもなお残る旧上海城であったようであるが、しかし、これは前田愛氏も指摘するように、芳秋蘭の身分―女工・共産党員―からいえば、閩北の貧民窟の地域に設定したほうがむしろ自然であつたろう。

ただ、このようなほとんど上海の風俗描写としての貴婦人（あるいは当時の中国美人画のなかの貴婦人か）といつてもよい人物造型は、はたして共産党員としてふさわしいのであろうか。小説に限つていえば、芳秋蘭の役割は五・三〇運動と主人公參木を結びつける仲立ちとなるにすぎないものであつて、共産党員であるという役割は、外部から彼女に押しつけられた感が否めない。

このような貴婦人としての芳秋蘭は初刊本および決定版に至ると、さらに「ダンスホール」にも出入りするようになつて、また今度は性格單一な紡績工場の組長高重に代わつて、謎のアジア主義者山口によつて紹介されるようになっていく。初刊本の第四節（決定版同、雑誌掲載のテキストの第一篇「風呂と銀行」の第四節に相当する）でアジア主義者山口と、參木の友人である甲谷との会話の途中、二人の眼に芳秋蘭の姿が映る。宮子のダンスホールで嫁探しのために上海に来ていた甲谷と出合つた山口は、芳秋蘭の姿を見かけ、甲谷にそれと告げる。

（山口）「あッ、あれは芳秋蘭だ。」

（甲谷）「芳秋蘭つて、それや何んだ。」

（山口）「あの女は共産党では、たいへんだ。君の兄貴の高重はあの女を知っているよ。」

甲谷が振り返つて芳秋蘭を見ようとする、そこへ、宮子が二階から降りて来て甲谷の傍の椅子に座つた、というところでこの場面は終わるが、その次の場面でも宮子の口を通して芳秋蘭への注意が再度喚起される。

（宮子）「あなた、ちよつと、あそこに芳秋蘭が来ているわ。」

（甲谷）「君、その芳秋蘭といふ女の方へ、僕をひつばつてみてみてくれないか。さつきも山口がその女の事を云つてたが、何だ。」

そこで、宮子は甲谷の腕を引いて踊りながら芳秋蘭に近づく。やっと間近で芳秋蘭の顔を見るや、甲谷は彼女の美貌に惹かれ、今度は逆に宮子の腕を引っぱって芳秋蘭の後を追いかける。すると、芳秋蘭のほうからも「舞いながら、男の肩の彼方から甲谷の方を覗いて」甲谷に好意を持ったかのように振り向くが、その顔に媚態を含んでいることは、甲谷がふと「歌余舞ひ倦みし時、嫣然巧笑。去るに臨んで秋波一転。」という徐校濤の美人譜の一節を口ずさんだことでわかる。「あの婦人は実に綺麗だ。珍しい。」と甲谷は感心しながら山口に芳秋蘭を紹介してくれと頼むが、山口は「だつて、君を紹介するのは、日本の恥をさらすようなもんぢやないか。」といい、さらに「それが、僕のはお柳の主人の銭石山に紹介されたんだからね。」と、それとなく以後の芳秋蘭と銭石山の関係を暗示する。

芳秋蘭の容姿描写はさらに詳細になっているのは、彼女に魅了された甲谷がその後を追ってゆく場面からである。「芳秋蘭の黄色な帽子の寶石が、街灯にきらめきながら車（黄包車）の上に揺れていつた。」「ブリッジ形の芳秋蘭の鼻は、ときどき左右の店頭に向きながら、街路樹の葉陰の間を貫いて通つた。唾を吐いてゐる乞食や、舗道の上で銅貨を叩いてゐる車夫や、口の周囲を光らせながら料亭から出て来たお客や、煙草を喰わえて人の顔を見てゐる売卜者やらが、通りすぎる芳秋蘭の顔を振り返つて眺めてゐた。甲谷は彼らがそんなに振り返り始めると、ふと忘れかけてゐる芳秋蘭の美しさを、再び思い浮かべて彼らのように新鮮になつた。ひき緊つた口もと。大きな黒い眼。鷺水式の前髪。胡蝶形の首飾。淡灰色の上着とスカート。」（初刊本・決定版第四節）とある。

この初刊本と決定版の第四節における山口と高重の次の対話は、改稿における重要な加筆としてさらに注意すべきであろう。

（高重）「芳秋蘭は今頃サラセン（さつき山口と甲谷がいた、宮子のダンスホール名）で踊つてゐるなんて、それはをかしいぞ。誰かいたか、傍にロシア人でもないなかつたか。」

（山口）「いたね。一人若い男がついてたよ。」

芳秋蘭は高重の下に属している女工である。この女工が日本人経営の踊場（ダンスホール）に出入りしていることを高重が理解しかねていることは、とうに山口にもわかつていた。

（山口）「しかし、いづれ秋蘭だつて、スパイだらう。どこへだつて現れるさ。」

(高重)「ところが、僕の工場には今しきりにロシアの手が這入つて来てるのでね。こ奴にはたまらんのだ。いつ爆発するか分らんので、実はひやひやしてゐるのだよ。手先の秋蘭は、どうも戦闘力が激しくつてね。」

(山口)「ロシアか、あれは不思議な奴だのう。わしにはあ奴は分らんよ。」

前田愛氏も指摘されている、芳秋蘭が淫婦の媚態を帯びることは、主にこの決定版からとらえられる造型であろう。⁽¹²⁾特に雑誌掲載のテキストにはなかったダンスホールの場面や、甲谷が芳秋蘭に魅了されて追いかける場面などにはその造型が著しく変わったことは引用した箇所からもうかがえよう。

この芳秋蘭の造型にみられる貴婦人らしさの増大は、作品内部における彼女の役割の複雑さに照応しているとみてよからう。それは彼女が、日本の特務機関員と思われる山口の眼からは、共産党から上海に送り込まれ、日本人経営の紡績工場の労働者さらに上海に居住する民族資本家を煽動し、いわゆる「ロシアが出した魔手」なるスパイと思われるところに起因している⁽¹³⁾。ただ、このような共産党員とスパイの結びつきは果たして上海に見られた現象であろうか。おそらくそうではあるまい。むしろ横光利一が経験する当時の日本共産党の生態だったのではなからうか。すなわち、日本へのマルキシズムの浸透に対する官憲(特高警察)と共産党員の陰湿な闘争、それゆえに地下に潜行せざるをえなかった日本共産党の党員の生態ではなかつたらうか。その生態が決定版における芳秋蘭の造型に投影されているとみられるのである。⁽¹⁴⁾

上に芳秋蘭の造型の一つとして「耳環」を取り上げた。『上海』において、この参木の目に焼き付いた「耳環」は芳秋蘭に限らず、他の紡績女工の描写にもよくみえるものであった。上海の女工が耳環をつけていたことは、横光の上海旅行中の見聞であったかどうかはわからないが、しかし、その現象、というよりも風俗の流行は、横光と同時代の日本人労働問題研究者宇高寧の『支那労働問題』のなかにも出てくることは興味深かった。これは偶然の近似というよりもむしろ共通的な時代性を持っていると見出されよう。この研究書が本稿で注意されるのは、これが大正一四年の八月、すなわち一九二五年の五・三〇事件の直後に出版されたということである。その時点には、まだ五・三〇事件は終束していなかったが、そのような時期にあつて、この『支那労働問題』は現代の概説書とは較べものにならないほどの龐大な資料が取り込まれている。

この研究書において、当時の上海にある中国紡績女工の「耳環」の話が載せられている箇所を引用すれば、次のようなものであった。

「日本人紡績（工場）に於ける支那女工は近来（最近）生活の程度が著しく向上して婦女工の耳輪や腕輪が銀（製品）より金（製品）に変わり汚損甚しかつた木綿服が絹服に変わつてゐることを一見しても其取得が如何に必要（平均的生活）以上に達してゐるものであるかを知ることが出来る。」⁽¹⁵⁾

著者の宇高寧がとくにこの個人体験にもとづく逸話を紹介する意図はどこにあったのであろうか。同書においてこの逸話が置かれた文脈をみて、著者がまず中国人の女工が上海にある日本人の紡績工場主に給料のアップを要求し、その目的を達するためにストライキを起こしたことを述べている。この一九二〇年代上海の紡績女工の生活状況の一端として紹介された女工の「耳環」の話はいうまでもなく、中国女工のストライキを「非分」だと思ふ著者の思想傾向を表現するものであろう。

この当時五・三〇事件を含む中国の労働運動を紹介する著書のなかで最も精細な本書を、横光利一が『上海』を執筆するとき参照したかどうかは断定できない。しかし、女工の耳環の逸話はきわめて印象深い記述である。そこになにやら芳秋蘭の耳環がダブってくるのは筆者の欲目であらうか。『上海』の執筆に際して横光がこの『支那労働問題』を参考にしたのではなからうかという可能性にとって、この「耳環」の逸話は一つの手がかりを与えてくれるだろう。

四 『上海』における五・三〇事件当日に関する描写

五・三〇事件当日の光景とその波及する問題をめぐっては、雑誌掲載のテキストでは第四篇「持病と弾丸」の第九節に描かれている。ただし、この『上海』が排外民族運動の契機ともなり、かつ五・三〇運動の頂点ともいふべき民衆蜂起と暴動の推移を運動の全体的展望のもとで把握しているかといえ、その点については疑問といわざるをえない。しかし、ともかくも、第一節にならって、まず作品に描かれた事件の梗概を簡条的に記述してみよう（すでに一部は前節で引用し

たことをことわっておく。

1 参木は中国人の扮装をして、上海の市街で中国人の民衆によって行おうとしている抗議活動への「視察」を命ぜられた。「その日」(五・三〇事件が起った日)、かれの眼前では上海市の街路に進出してきた中国人の工人や学生たちの群衆に向かって印度人警官隊が発砲するといった事件が起った。参木は逃げ込んだ商店の入り口の回転窓のガラスに垂れ下がって映っている群衆の中から、芳秋蘭を捜し続けていた。二人はやっと出会ったが、群衆の雑踏に紛れてまた離ればなれになってしまった。

2 警官の発砲によって、群衆はビルの影に四散して逃げ込み、街路には死者と負傷者が倒れている以外には、人影も消え、一瞬の静寂が漲った。
〔持病と弾丸〕第九節

3 参木は、そんな街路の真中へと「死の魅力」にとりつかれたように歩み出した。すると、群衆の中から現れた芳秋蘭によって腕をつかまれ、「早く逃げるように」と声をかけられ、近くのホテルへ連れられて入った。
〔持病と弾丸〕第九節

4 ホテルの一室で参木は芳秋蘭から先日、彼女を救い出したことへのお礼を言われる。その後、二人してホテルの部屋窓からデモの惨状を眺めながら、芳秋蘭は中国の民衆の憎しみが日本の紡績工場から、印度人警官隊に発砲を命じた英国官憲に向けられるであろうと参木に告げる。
〔持病と弾丸〕第九節

一読して察せられるように、この描写からは、事件の全体像も、そしてこの事件を背景とする参木と芳秋蘭の劇的な再会も、いずれも的確に描かれているとはいえないし、それにまた、事件と男女の再会が緊密なプロットを構成するように結びつけられていない。その要因は題材とする五・三〇事件の描写がきわめて曖昧だからであって、ここからは事件の大まかな輪郭すら読みとることはほとんど不可能なことである。

事件の報告書は当時いくつもあったようだが、そのなかでもイギリス人巡査長(巡捕頭)愛活生(Everson, Edward William)が事件当日に行なった報告が最も詳しい。いまそのなかから当該の箇所を抜粋してみよう。

〔五月三十日の報告〕午後二時四十五分頃、(われわれ巡査は)チベット路で(反日宣伝を行っていた)六人(の学生)を逮捕した。(中略)これらの学生を捕房に連行してきたとき、多くの群衆もついて来て巡捕房のなかに入ろうとした。

私は群衆を追いつく命令を出したところ、(中略) 憤激した群衆は「外国人を殺せ」と叫んだ。私は玄関のところにいたインド人巡査と中国人巡査に発砲の用意をさせて、群衆が捕房になだれ込んできた瞬間、発砲の命令を出した。それは三時三十七分のことである。そのときには巡査たちは合わせて四十四発を発砲した。内訳は、インド人の巡査が二十三発、中国人の巡査が二十一発であった。」

〔六月二日の補充報告〕当時(五・三〇事件が起る直前)、私と副捕頭謝爾斯威爾(Shellswell, Rex)ら(の英人巡査)以外にも、巡捕房にいるインド人と中国人の巡査全員が出動した。インド人と中国人の巡査の一部は銃を持って巡捕房を警備していたが、その他の巡査(西欧人をも含めて)は全員南京路に出動して、そこに集まっていた群衆を解散させた。(次は、一部のアジテーターが逮捕された後、憤激した群衆が巡捕房を包囲したことについての叙述、ここでは略)私は武力を行使する必要があると判断して、西欧人を巡捕房の玄関に待機する武装巡査の背後に後退させてから発砲の命令を出した。最初の一発は私がインド人の巡査の手から取った小銃で打った。すると同時に、副捕頭謝爾斯威爾も群衆に向かって拳銃を発射した。¹⁶⁾」

一九二五年五月二十六日付の「工部局刑務処捕房令」によれば、「(共同租界の)警官隊は状況が十分重大だと判断して発砲しなければならない場合、暴徒のなかでも最も威嚇性のある部分に対して射撃すべきである。¹⁷⁾」と布告されていたが、その日付からみて、暴動の起る事態は十分予想されていたようである。五月三〇日になって中国民衆の暴動は起るべくして起った。右に引用した報告書によれば、この日、日本人経営の紡績工場のストライキを支援する中国人学生たちは上海市内の繁華街に出て、激しい反日抗撃のアジ演説を行って市民に連帯を呼びかけたようである。工部局の警官はその街頭宣伝が市民を煽動するアジテートと判断し、学生の指導者を現行犯として逮捕し、巡捕房に連行したところ、学生に連帯感を寄せる労働者と市民たちが群衆となって巡捕房に押しかけて来て、警官隊の制止をふり切って巡捕房のなかに入ろうとした。群衆の激高を察知した警官隊は、かれらが暴動化することを恐れて解散させようとして発砲した。そのために群衆は一瞬怯んで一度は四散したものの、ビルの陰に逃げ込んで発砲を避けようとしただけで、解散しようとしなかったと思われる。そこで武装警官隊は「南京路」にいる群衆を鎮圧、駆散させようとした際に民衆に向かって発砲された。小説『上海』の1、2の描写はこの経過を描写したものであったろう。

事件は当初、反日をスローガンとした群集の集会であったが、官憲が中国人学生のアジテーターを逮捕したあとは、群衆の行動はデモ化した。そのために、工部局の警官隊が群集に向かって発砲したところから、反日の抗議行動は一挙に日本を含めての西欧列強の排外を目的とする民族運動へと展開していった。この小説のなかで、芳秋蘭は抗議行動が英国官憲にむけられるとつぶやいたが、それは、ある意味では、この事件の拡大、深化の方向性を示唆していたともいえよう。それでも、注意せねばならないのは、当時の検閲のためであろうか、芳秋蘭のつぶやきは若干史実に反する。事実は、中国国民衆にとって日本もすでに排外の主要な対象であった。したがって芳秋蘭のつぶやきはおそらく、作家の意図による日本ナショナリズムへの配慮にすぎないであろう。

以上が報告書から読みとれる事件の概要である。右の報告書がほぼ正確であったことは、英人巡查泰布倫 (Tabron, Reginald Francis) の事件報告や「工部局警備委員会による総巡表高雲と巡查愛活生などからの五・三〇事件に関する陳述の聴取会議記録」なども同様の証言をしていることでわかる。⁽¹⁸⁾しかし小説では、参木という人物の限定された視点、さらには描写の焦点が参木と芳秋蘭の出会いというプロットに置かれているために、その背景となっている五・三〇事件の描写については一警官の報告ほどにも詳細ではない。おそらく小説は事実の全体像の把握につとめる意図がなかったのかもしれない。それでは、横光利一が『上海』において五・三〇事件を題材とすることで何を伝えようとしているのであろうか。このようにあらためて問題を設定するとき、この作品を検証すれば次の四点の特色をあげることができよう。

- 1 (日本人経営の紡績工場のストライキに同調する上海全市の工人たちは、高重の工場でストライキに入った工人たちを支援するために、日本人経営の他の紡績工場でも一斉にストライキを挙行し、上海全体に拡大させていった。) 日本人経営の紡績工場の被害 (ストライキ・打ち壊し・放火) を強調的に書かれている。
- 2 今度の日本人経営の紡績工場における罷業 (ストライキ) の拡大によって、日本製の綿製品の生産は一挙に落ち込み、上海の租界を領有する欧米列強 (英・米・仏など) の銀行や金融業者の金融操作によって、「対日為替」が上がり (日本円の価値が暴落)、金塊相場が上昇してしまった。それに反して、日本円が暴落した。
- 3 日本製の綿製品の生産の減少に反比例して、印度 (イギリスの植民地) からの綿製品の輸入と中国製の綿製品の生産が上昇した。
- 4 日本人経営の紡績工場における一斉にストライキをしたことを大きな契機として「総商会」(中国人資本家の工商団体)

「濱中総工会」（上海市の紡績工場労働組合）と、さらに中国共産党や、上海秘密結社といった民族系団体の間に一定の協力関係が成立し、排日運動を共通の目標にかかげて活発に活動し始めた。

これらの国際経済の動向と情報はいずれも、参木の眼でとらえられたものか、あるいはかれの得た情報という設定である。この四点の特色によれば、かれの眼と耳が集中するのは、東アジアの国際都市上海に進出した日本資本の運命であり、日本資本の進出と拡大をはばむ国際資本と民族資本、それに中国人労働者の動向である。とくに国際資本以下の動向に対する参木の反応は敏感になっているとともに、そこにまたある種の反感を含んでいることに注意する必要がある。

参木の視点と反応はいうまでもなく、上海に居留するかれの国際認識と日本人としてのアイデンティティにもとづいていよう。かれは上海に進出していた日本系銀行の銀行員であったが、そこを退社して、いまは高重の勤める日本人経営の紡績工場に勤務している。したがって、国際経済に関心が向くという設定は当然であろう。しかし、かれのアイデンティティ（帰属意識）とはなにか。それは決して天皇を戴く日本という国家ではない。「風呂と銀行」第一節によれば、それは母の住む故郷であり、片思いの恋人である競子の住む土地である。このようなアイデンティティは、ある意味で、素朴な共同体意識にすぎないであろう。ただそうした意識をもって国際都市に入り込んだとき、日本人はどのような思考と行動をとるのであるか。このような参木の造型に留意しながら、「足と正義」において披瀝されているかれの国際認識をとらえるとな次のような点が指摘できる。

1 日本の資本と大陸の資源が結びついてこそ日本と中国の発展はある。

2 しかし、中国人の職工たちは、そのような日本の経済政策を大陸の資源の一方的な搾取とみなすことで、日本の資本を敵視し、いまストライキをもって日本資本を排除しようとしている。

3 確かに一面からすれば、日本の政策はやはり大陸の資源を搾取するものであると認識できるので、日本の資本の大陸への「増大」には反対である。その限りでは、中国の職工たちに同情できるし、かれらのストライキにも共感できる側面もある。

4 しかし、英国をはじめとする西欧列強の中国大陸に対する政策を注意して観察すると、かれらはみずからの既得の権益を守ろうとして日本の資本主義の発展を阻止しようとしていることがわかる。その現れが大陸での日本製品の販路をふさぐようとしていることである。ちょうどそのような時期、日本の資本が投下された紡績工場の内部においても、

中国人の職工の間に「マルキシズムの台頭」があって、日本の資本主義の拡大を阻もうとしている。その労働運動は奇しくも西欧列強の政策と一致してしまっている。

5 かくして、日本の資本主義は外部の西欧列強と、内部の職工たちのストライキによる障害に遭って、困難な状況に陥っていると思われる。

このような国際都市上海における西欧列強と民族資本、それに中国民衆の動向を見つめ続けてきた参木からすれば、かれの身近で起った五・三〇事件(運動)は、かれ自身の国際認識のコンテキストのなかでとらえられるのも必然であろう。したがって、参木にとって、五・三〇運動が重大であったのは、その運動に連動して惹起するところの上海における国際金融資本の反応であり、国際商品である綿製品の輸出入と購買動向であった。初刊本『上海』の序文において横光利一が「¹⁹中国の近代における五・三〇事件の意味を日本人の知識人に伝えようとする意図はこの点にあったというのであろうか。しかし、このような参木の認識を規制しているのも、たとえば、3にみるように、中国民衆の側に向いた姿勢も部分的には見られるにしろ、おおむね日本人としての独善的で功利的なナショナリズムであることはいうまでもない。それに災いされ、かれの国際的視野はきわめて狭く、かつ偏向するものであることに注意する必要がある。それは決して多元的な価値観をみとめ、それぞれの存在を尊重し合う根拠ともなり得るアイデンティティとは異なる姿勢であることはいうまでもなからう。

このような参木の視野の狭さをうかがわせるところのかれに与えられた視点の問題は、上海の港湾に威容を現してくる各国の駆逐艦にかかわる描写からもあきらかにみとれる。ただ、次に用例を挙げる小説の1と3では高重に与えられている視点からすれば、小説の視点の狭さは作中人物のそれというよりも、それが複数化されているところから、むしろ作者横光利一の視点の狭さといってよいかもしれない。小説では、駆逐艦に関する描写は、五・三〇運動とかかわらせることなく、ストライキの直前の場面からすでに点景として描かれ、その後さらに数回にわたって触れられている。

1 参木は河の方を見た。河には、各国の軍艦が本国の意志を持って、砲列を敷きながら、城砦のやうに塊まって停まつてゐる。

(「足と正義」第九節)

2 高重は屋上から工場の周囲を見回した。駆逐艦から閃めく探海燈が層雲を浮き出しながら廻つてゐた。黒く続いた炭層の切れ目

には、重なつた起重機の群れが刺さつてゐた。密輸入船の破れた帆が、真黒な翼のやうに傾いて登つていつた。そのとき、炭層の表面で、艦樓の群れが這ひながら、滲み出るやうに黒々と拡がり出した。探海燈がそれらの背の中の上を疾走すると、艦樓の波は扁平に、べたりと炭層へへばりついた。

〔持病と弾丸〕 第七節

3 高重は電鈴のボタンを押した。すると、見渡す全工場は、真暗になつた。喚声は内外二ヶ所の門の傍から、沸き起つた。石炭が工場を狙つて、飛び始めた。探海燈の光錠が廻つて来ると、塀を攀ち登つてゐる群衆の背中が、蟻のやうに浮き上つた。

〔持病と弾丸〕 第七節

さらに、この小説の最後の場面で、お杉と再会した参木が「明日は日本の陸戦隊が上陸してくる」だろう（「春婦——海港章——」、初刊本第四五節・決定版第四四節）と言つたが、駆逐艦に象徴される西欧列強の軍事的威嚇はこの言葉によつても暗示的に伝えられている。この駆逐艦の姿の背後に隠蔽されている意味と、参木のつぶやきにこめられることばの意味とがどのように関わっているのか、小説の中では必ずしも明らかにされていない。五・三〇事件の史実においては、この西欧列強が派遣した駆逐艦は上海民衆の五・三〇運動を鎮圧する上で、重要な軍事的役割を果たしていたことが確かである。以下は『帝国主義による上海市民への虐殺経過』から史料を挙げてみる。

ア「六月一日——共同租界では全域罷市を行っている。運輸業界（電車）の労働者もストライキを始める。午前七時から、大勢の学生・労働者・市民は街に出て、抗議のアジ演説をしている。十時頃、工部局の万国商団の団員と巡査たちはホースで群衆を追い払つていたが、十時五十分頃になつて、ふたたび群衆に向けて発砲し死者を出した。この「二次虐殺」と呼ばれる事件においては、前日より多くの死傷者を出した。南京路の一番繁華な、新世界から福建路に至るまでの地帯は、戦闘状態に陥つた。機関銃、装甲車、騎馬隊によって要塞が固められ、電車以外、他の車両及び歩行者の通行が禁止された。」²⁰

イ「六月二日——運輸業界のストライキは拡大する。虐殺は継続中。南京路がより嚴重に警戒されたこの日、工部局は先月の三十日に逮捕した学生を尋問した。午後六時、新世界付近で騎馬隊の二人のアメリカ人が暴徒に射殺されたために、租界の武装隊は新世界に向かつて、二十分間ほど機関銃や小銃を発射した。」²¹

ウ「六月三日——イタリア、アメリカの海軍陸戦隊が上海に上陸し始めて、それぞれ電気・水道などの重要施設や工場を警備するようになった。それに続いて、他の各国の軍艦も陸続として上海港に着岸。上陸した陸戦隊が楊樹浦に向かい、午前中からすでに始まっていた上海民衆への虐殺に加わって、この地区全域を恐怖に陥れている。新世界は万国商団によって占領された。運輸業界はほぼ全体が罷業の情勢に立ち至り、電話・電灯の業界も三分の二以上は罷業に入った。」⁽²²⁾

エ「六月四日——虐殺継続中。上海に到着した外国軍艦の数も前日より増えている。四日までに、上海港に連なつて繫泊する各国の軍艦は総計十三隻で、そのうちには日本の軍艦が三隻いる。すでに上海に上陸した五百五十人の陸戦隊以外、さらに二十人ほどが上陸中。午前中から、陸戦隊は上海大学から学生を追い払ってそこに駐屯した。五日以後、他の大学（大夏大学、同徳大学、南方大学などの各大学）も占拠され、陸戦隊の駐屯地とされた。」⁽²³⁾

以上、四つの史料から、事件が一層激化していく経過のなかで、民衆の暴動はもはや租界地（共同租界）の警官隊の武力では鎮圧しかねる事態に立ち至ったとみてよからう。そのために租界地の各国領事館の要請にもとづいて西欧列強および日本は連合して駆逐艦および陸戦隊を派遣した。事態の推移は上海全市が労働争議から西欧列強および日本の排除へと深化していった。そのために、本格的な武力をもしか暴動化した上海の労働者、学生の要求を抑えることができなくなっていたのであろう。すなわち、上海における五・三〇運動の拡大過程が質的に新たな段階に入るとともに、最大の武力をもつて全市を制圧するために、上海の港湾にその威容を現わしたのがウ、エにあげた駆逐艦であった。したがって、この小説において「駆逐艦」がたんなる点景として描かれているだけで、事件の全体像にかかわる視点を欠いているということは、この小説が五・三〇運動のもつ世界的意義になんら関心を注いでいないだけでなく、運動にかかわる中国民衆の希望と熱意にまったく冷淡であることを背後から説明しているように。

運動の方向を中国民衆の側に身を置いて見つめようという顧慮は作中の日本人の誰にもみとめられない。その姿勢からうかがえるものこそ偏狭なナショナリズムにすぎなからう。この小説の作家にとつては、国際都市上海に居留する参木を始めとする作中人物の日本人としてのアイデンティティとは、いかなるものなのかをとらえることが一つの主題であったと考えられる。いうまでもなく、アイデンティティとは多元的価値の認識に展開し得るものであった。しかし、それがほ

とんど他者を排除する偏狭なナショナリズムとなんの区別もないところに作中人物というよりも、時代に制約された作家の限界をみてよいのではなからうか。

五 中国人の民族資本家銭石山の露悪的描写にみる日本人の視点

上海に居留する日本人の視点の問題は五・三〇運動の全体像の認識不足にとどまらず、中国民衆に向けられる眼をも規制する。すでに本稿の第三節で女性共産党員芳秋蘭の造型について言及したが、ここでは民族資本家銭石山の造型を問題にしてみよう。

銭石山がこの小説に登場するのは、トルコ風呂を経営する一方で、客となってやって来る若い日本人男性との肉体関係を求めてやまぬお柳の中国人旦那としてである。そこではまだその名は明かされず、「富豪の支那人」としてほのめかされるだけである。

次に、銭石山が登場するのは、五・三〇事件を絶好の機会として、日本を含めての西欧列強を上海から排除しようとする民族資本家としてである。かれは五・三〇運動が拡大・深化する過程で、共産党員の芳秋蘭が煽動する罷業に莫大な援助資金を提供するとともに、上海市の商人たちを率いて罷市をも断行する一員である。

「持病と弾丸」第八節には、銭石山らの民族資本家が日本の紡績会社との対抗する姿が描かれている。

支那人紡績は、前から久しく邦人会社に圧迫せられてゐたのである。彼らは邦人会社さへ、全力を上げて機械の運転を開始し始めた。罷業職工内の熟練工が、続々と彼らの工場へ奪られ出した。国貨の提唱が始つた。日貨の排斥が行はれた。さうして、支那人紡績会の集団は、今こそ支那に、初めて資本主義の勃発を企画しなければならぬ機会に遭遇したのだ。彼ら集団は自国の国産を奨励する手段として、彼らの資本の発展が、外資と並行し得るまで、ロシアをその胸中に養はねばならぬ運命に立ちいたつた。何ぜなら、支那資本は最早やロシアを食用となさざる限り、彼らを圧迫する外国資本の専制から脱出することは、不可能なことにちがひないのだ。支那では、かうして共産主義の背後から、此の時を機会として資本主義が駆け昇らなければならなかつた。／此の支那資本家の一団である総商会の一員に、お柳の主人の銭石山が交じつてゐた。彼は日本人紡績会社に罷業が起ると、彼らの一団と共に策動し始めた。

彼らは支那人紡に資金を増した。排日宣伝業者に費用を与へた。同時に罷業策源地たる総工会に秋波を用ふることさへ拒まなかつた。さうして、此の支那未曽有の大罷業が、どこからともなく押し寄せた風土病のやうに、その奇怪な翼を刻々に拡げ出したのだ。

それでは、このような民族資本家が小説のなかでは具体的にどのような造型されているのだろうか。雑誌掲載のテキスト「持病と弾丸」第四節における甲谷の眼に映る銭石山の姿をみてみよう。

甲谷は豪商のお柳の主人の銭石山（ここで始めて「銭石山」という名前が出た）に材木を売りつける方法を考へながら、女中の指差した奥を見た。「月明の良夜、慇懃に接す」ふと房前の柱にかかつた対子を読むと、甲谷はお柳の背中の蜘蛛の色を思ひ出した。お柳は正面の八仙卓の彫刻の上で、西瓜の種を割りながら、僂僂の男と笑つてゐた。側壁に沿つて並んだ紫檀の十景椅子の上では、重そうな大輪の牡丹の花が、匂ひを失つたまま崩れてゐた。（中略）銭石山の僂僂の背中が、牡丹の花の上で揺れながら、笑ひ出した。「ああ、さうさう、今日はまた日本紡が四つほど罷業で沈没しました。いよいよこれは、」と主人は云うと、八仙卓の角を持つたまま、急にぶるぶると慄へ出した。お柳は主人の後から立ち上げると、僂僂を抱いて寝台の上へ連れていつた。「一寸暫く、御免なされ。時間がやつて来ました。」主人は甲谷に会釈をしながら横になると、お柳の与へた煙管を銜へて眼を細めた。彼の唇が魚のやうに動き出すと、阿片がじーじー鳴り始めた。（中略）お柳は主人の傍で煙管の口を焼き始めた。甲谷は、ふと、彼ら二人が自分の視線を楽しむために、この楼上へ呼び出したにちがひないと判断した。（中略）二人は間もなく、恍惚とした虫のやうに、眼を細めた。お柳の豊かな髪が、青貝をちり散めた螺蛸の阿片盆へ、崩れ出した。僂僂の鼻が、並んだ琥珀や漢玉の隙間で広がつた。

この二つの描写は、銭石山に材木を売りつけようとかれの家にやつて来た甲谷の眼に映る銭石山の容姿である。お柳に抱きかかえられながらベッドに横たわる怠惰で萎えたこの病弱な「僂僂」の姿は、まさに阿片に侵された中毒患者そのものである。それに部屋調度も、「お柳の背中の蜘蛛の色」を思わせる頹廢と爛熟のムードが漂っている。つまり、銭石山の容姿はあたかも暗黒街の秘密結社のボスではないかと思わせるものであつて、国際資本に対抗し、それと駆逐しようとする野心に燃える民族資本家の姿とはどういふ思えない。

その造型は決してリアリズムではあるまい。日本人のナショナリズムがその眼をゆがめた露悲的な描写とみとめてよからう。ちなみにいうと、「掃溜の疑問」第一節に参木の眼に映る上海の一風景として、露地の料理屋の主人が阿片を吸う

場面も描かれている。

彼（参木）の前では、煉瓦の柱にもたれた支那人が眼を瞑つたまま煙管を吸つてゐた。煙管の針の先きで、飴のやうな阿片の丸が裸へながら、ぢいぢいと音を立てた。

露悪と頹廢、そして無氣力がはびこる上海の露地の風景——阿片を吸う場面はいかにもその風景にふさわしいのかもしれない。しかし、その阿片を吸う姿がこの銭石山の一つの特徴として用いられるとき、銭石山のイメージは上海の露地に住む下層民のそれと重なってしまう。租界都市上海の当時にあつても果たしてそのようなイメージが中国系の産業・金融資本家にみられるのであろうか。やはり偏向に満ちた露悪的描写といわざるをえないであらう。

この露悪的な描写は改稿された初刊本『上海』では幾分か強化されているようである。というのは、ここでは銭石山の醜惡な容姿が雑誌掲載の段階のままであつたのに対して、かれが民族資本家としての役割が弱められるようになっていくからである。初刊本および決定版の『上海』のテキストにおける加筆は、芳秋蘭と銭石山の造型が雑誌掲載のテキストよりもっと早めに登場させられたことに集中している。そのうち、たとえば、銭石山だが、かれの登場は雑誌掲載のテキストにおける小説後半からではなく、冒頭のほうに繰り上げられていて、アジア主義者である山口の口をとおして語られるようになっていく。そこでは、甲谷が芳秋蘭の美貌に惹かれて、彼女を紹介してくれと山口に頼むのだが、山口は「僕のはお柳の主人の銭石山に紹介されたんだ」（第四節、決定版も同じ）といつて、芳秋蘭との関係だけでなく、銭石山との関係をもほめかしている箇所がそれである。さらに、雑誌掲載の「持病と弾丸」第四節に相当する第二八節（決定版同じ）では、本節でとりあげた甲谷と銭石山の出会いの場面でも、雑誌掲載のテキストよりもっと象徴的に描かれる。すなわち、雑誌掲載のテキストでは、お柳と銭石山が阿片を吸う様子を見て、甲谷は二人が自分を無視しているのではないか感じるのだが、初刊本および決定版になると、この甲谷はかれらのまるで自分を無視するような様子を眼にすると、一変して堂々と国際関係のなかにおける日本と中国の状況に熱弁をふるい、その結果、銭石山は返す言葉に詰まつてしまつたというふうに変更されている。

この改稿の方向性はおそらく銭石山の民族資本家としての造型を讀者に印象づけようという意図をももつていよう。こ

の小説における山口という人物は「アジア主義者」と紹介されているところからも、中国共産党員とも接触すれば、中国民族資本家とも接触する人物であった。そのような行動の裏付けがあつてこそ、アジアの状況に精通しているというのであろう。そのことは甲谷の国際関係の熱弁にもみとめられよう。銭石山が上海在住の民族資本家として上海の国際的地位に敏感だという設定がその背景になければなるまい。

六 五・三〇事件以後における拡大・深化過程に関する小説描写と史実

前述のように、上海における五・三〇事件当日の発端は、共同租界を警備するイギリスおよびインド人警官隊の発砲による民衆の射殺事件から始まった。この事件に激高した上海の市民は学生のアジ演説やビラの配布といった情報をおし急速に連帯感を盛り上げ、全市的に罷業、罷市、罷学といった救国民族運動へと展開していった。この段階が五・三〇運動の最終段階と認められる。この運動の質的な変化は、上海市民の間に――商人、学生を含めて――連帯感が醸成されていくとともに、民族運動の方向性が明確化してきたことであり、そこに国家意識の自覚というナショナルリズムが急激に拡大・深化していったところにあった。

小説『上海』において、この五・三〇運動の最後段階に関する描写は、初出の第五篇「海港章」および「海港章」の補充とみられる「婦人―海港章―」、「春婦―海港章―」にかなり詳しく叙述されている。そのうち、運動の深化過程にとつても重大と思われる事件としては、「罷市」「陸戦隊の上陸」「市街戦」「外国人への狙撃・襲撃」などがあげられるが、小説には「陸戦隊の上陸」以外の事件が描き込まれている。そこで、ここでもまず、小説における当該箇所の梗概を順を追ってたどり、次にはその箇所に対応する事件の報告記録をあげて、小説における描写の特徴について追究していくことにしよう。

1 この日も「視察」のために群衆の中に交じっていた参木は、昨日と同じように芳秋蘭の姿を探した。「市街戦のあったその日」から、中国民衆の怒りは日本を含む西欧列強に向けられ、日本人経営の紡績工場のストライキは拡大して罷市(街頭演説・聯合会議・工部局特別会議への反対などの行動を経て到達した上海全市の商店による営業中止運動)および中学から大学に至るまでの学生ストライキへと展開していく。

(「海港章」第一節)

2 この日再び、警官隊の発砲に抗議するため、民衆は「排外」のスローガンを叫びながら工部局の方へと向かった。それに對して、工部局側は道路の両側に消防隊を配置させ、ホースによる放水でもって群衆を解散させようとした。消防隊の放水による阻止を突破した群衆に向かって再び発砲が命令された。追い散らされた群衆は、電車を止め、道路の両側の「外人店舗」に投石したり掠奪をして次第に暴徒と化していった。暴徒たちは、騎馬隊の警官や装甲車の追跡をしりめ、あちらこちらの街路に出没しては投石と掠奪を繰り返して警官隊を愚弄しながら、総商会のホールへと集合していった。

〔「海港章」第一節〕

3 そのホテルでは商会総連合会と学生団体の連合会議が開催されていて、まもなく「外人に對する罷市敢行」の決議がなされ、上海全市街のあらゆる機関が停止することが予想された。

〔「海港章」第一節〕

4 工部局の特別納税会議において、外国居留民代表と中国商人団の間に激論が交わされていたが、参木は群衆のつばやきから中国人が勝ったとわかって、その背後で争議を指導している芳秋蘭の誇らしげな笑顔を感じた。五・三〇事件の暴動が起つて以来、参木はずっと彼女に会っていなかったにもかかわらず、彼女がきつと群衆のどこかに活躍していることを直観していた。

〔「海港章」第四節〕

5 工部局の騎馬隊が街路の両側の屋内から狙撃されたため、ただちに外国人義勇兵も応戦した。そのために、街では市街戦が再び勃発した。

〔「海港章」第四節〕

このうち、「罷市」「市街戦」などの叙述に對應する史実については、前節に掲出した『警務日報』の1〜4の史料があげられよう。この運動の拡大過程において小説が多くの叙述を費やしているのが日本人への狙撃・襲撃であろう。その予兆としてはすでに、第四篇「持病と弾丸」第九節のなかで、「襲撃された、の噂が、日市中を流れてきた。、の貨物が掠奪されると、焼き捨てられた。、を扱ふ商人が先を争つて共同租界へ逃げ込んだ。」と五・三〇事件直前の叙述に伏せ字ながらそれと知られる事件が語られているし、さらに第五編「海港章」にも、「暗殺される外人の家の柱に白墨のマークが附いた。工部局では復讐のために大挙して襲ふであろう群衆を予想して、各国義勇団に出動準備を命令した」(第一節)というようにとり上げられていた。やや曖昧なこの叙述は、アメリカ兵の騎馬隊に向かって暴徒から狙撃があったという事件で現実化していた。工部局のアメリカの義勇兵からなる騎馬隊が街路に出動すると、両側のビルの屋内に隠れている中国人から狙撃された。そこで騎馬隊も発砲を返したために、その現場では見る間に市街戦の様相を呈したので

あった。

このような狙撃事件が小説の登場人物とかかわるように構想されたのが、甲谷と参木への狙撃と襲撃事件であった。まず甲谷への狙撃事件だが、「罷市」による商店や飲食店の外国人ボイコットのため、食事にありつけなくなったかれが食事を求めて、黄包車に乗って街をさまよっている途中、製氷工場にさしかかったところ、どこからか彼を狙って狙撃する中国の民衆が現われた。「婦人―海港章―第一節」。同じような日本人襲撃事件は今度は参木の身にもふりかかる。食事にありつけたあと、宮子の家を出た参木は、宿泊している自分の部屋に帰ろうとして、ある橋を渡りかけたところ、不意に中国人と思われる数人の男に襲撃されて、橋の上から泥溝に投げ込まれてしまう（「海港章―第七節」）。

二人に災難をもたらした事の起りを少しさかのぼって説明すると、上海に起った五・三〇事件の展開を見続けてきた参木は、「雑踏していた市街が急に森のように変化した」（「海港章―第六節」と感じる。この比喩は実は紡績工場のストライキが罷業から罷市、罷学へと展開していった拡大・深化過程に呼応して、上海の民衆が外国人の周辺から消え去ったことをいいたったものであった。

そのために、食品は手に入らなかった。居留日本人にとっては、長崎から運ばれて来る食糧を待つ以外仕方なかった。その食糧が到着するまでに参木と甲谷は空腹を満すために、あちらこちらと歩き廻った挙げ句、甲谷と別れた参木は宮子の家にたどり着いた。宮子は、義勇兵となった外国人の恋人からパンやソーセージなどを一杯もらっていた。宮子は参木に食物を出して食べさせた（「海港章―第七節」。一方、甲谷は空腹のまま、人気のない街路をさまよっていた。「兄の高重もひどいことをしたものだ。高重と印度人の鉄砲一つの弾丸が、街をこんなに混乱させてしまう原因にならう」とは全然思わなかったかれは、「革命とはこんなに静かなものなのであらうか」と考えながら、黄包車を走らせていたときに狙撃されたのであった。

この甲谷に対する狙撃事件は、すでに第四節でふれた外国人に対する狙撃事件を背景にして解釈してよからうと思う。参木が中国人の暴徒によって泥溝に投げ込まれるというプロットも実は五・三〇運動の過程のなかで派生した事件として確認である。

事実としての報告を一つあげるならば、

「暴徒たちは日本人に対して敵意を抱きながら（狙撃を行なっていたが、その他にも）、電車で投石してその運転を阻止しようとしている。（以下、電車を破壊することに関しての記述は略）⁽²⁴⁾」

という記事があつて、また参木が泥溝に投げ込まれたことについては、

「六月二日、午前九時五分頃、西蘇州河路で巡邏中の日本人巡捕塚崎は紡績工場の労働者に河に投げられ、当時ちょうど一隻の船が閘北からこつちに向かつているが、かれは水中からその船に登ろうとしたけれども、船上の労働者に棍棒で押されてふたたび河に落ちてしまう。かれの片手は傷ついたため、弾丸を銃に入れることはできないが、そのかわりに歯で打ち金を引いて弾丸を入れ、船に向かつて発砲した。船上の一人が撃ち殺され、二人が負傷した。（その騒ぎのなかで）四人の中国人の労働者が船から河に落ちて、一人は死亡。（中略）日本人巡捕の手の傷はそれほどひどくはなかった。⁽²⁵⁾」

という史実が対応しようか。泥溝に投げ込まれた参木は、中国人の暴徒がかれの死を確かめるためか、まだ橋の欄干から眺めているのを察して、かれら一群が去るまでじっと死んだふりをしてそのまま水面に浮かんでいた。すると、まわりの船から漂ってくる肥料のにおいがして、参木は思わず故郷のことを思い出した。暴徒が橋から去ったことがわかれると、泥溝から這い出した参木はすぐ危険区域を通り過ぎて、露地の奥にあるお杉の家に入った（『海港章』第七節および「春婦——海港章——の冒頭」）。

『上海』における五・三〇運動描写はここで終わっている。本論もここでとじることしよう。

七 むすび

『上海』という作品を考察してきたのだが、あらためてこの作品の構成をみると、この作品は二つの筋立てがないまぜとなっていることがわかる。

(1) 上海という異国の国際都市を舞台にして、参木・甲谷という二人の日本人男性とそれを取りまく数人の日本人女性、さらに一人の白系ロシア人女性オルガの間における性と金をめぐって織りなされる物語。

(2) 中国における排日運動のきっかけをなした上海の五・三〇運動を題材として、中国の激動の歴史に巻き込まれる日本人参木と中国人革命家の女性芳秋蘭の物語。

という二つの物語がそれである。本稿はこのうちの(2)に焦点をあてたものである。すでにふれておいたことだが、作家はこの作品において、国際都市上海に日本人が身を置けなければ、いったい如何なる思惟と行動をとるのかを実験しようとした作品を意図したのではなからうか。日本人とは何なのか。その主題を異国にある日本人の内なる日本のイメージ——かれらのうちでは日本がどのようなイメージをもっているのか——をとおして逆照射しようとしたといつてもよからう。したがって、(2)の物語の筋立は、おそらく作家の意図の具体化として当時勃発した五・三〇運動という中国民衆の救国のための闘争のなかで翻弄される日本人たちを描こうとしたと思われる。しかし、それがはたして成功しているかどうかは、これまで見てきたように、疑問といわざるをえない。

しかし、主人公参木における日本人のアイデンティティが偏狭なナショナリズムと分かち難く結びついて現れていることは看過できない内容を含んでいる。参木におけるナショナリズムと結びついた日本人としてのアイデンティティには、もちろんかれの銀行員・会社員という経歴にもとづく国際的な経済認識にあるわけだが、前節の最後で紹介したように、泥溝に投げ込まれた参木が泥水に漬かりながら、ふと故郷のことを思い出した、という意識には注目する必要がある。すなわち、かれの日本人としての意識を支えている母胎は、母国に残した母親の存在と、日本に嫁いでいる競子への変わらぬ思慕の情であつたのではなからうか。

つまり、参木にとって「日本」とは、国家と観念されるよりも、むしろ母親の住む故郷、恋人のいる土地という家的というか、あるいはムラの意識によってしかリアリティをもたないものであつた。それが無媒介に国際世界に投げ込まれるや、抽象観念としての「日本」がたちあらわれる。つまり参木にとっての「日本」とはまったく家的・ムラの観念でしかなかった。そこには当然のこととして、共同体を超える国際感覚というものが胚胎する余地はなかつたとみてよからう。その端的なこの小説でのあらわれが芳秋蘭と銭石山という二人の中国人の造型の偏見にもとめられることはいうまでもなからう。

註

- (1) 例えば、上海社会科学院歴史研究所編『五卅運動史料』（上海人民出版社一九八一年）および本稿が多く参考した『五卅運動』（全三冊、上海市檔案館編集、上海人民出版社一九九一年）などがあげられ、またこのようならえ方は一九二〇年代代英の講演稿「五卅運動」などの時点からすで見られるものであることは指摘しておきたい。
- (2) 『警部日報』一九二五年二月十日記事、上海市檔案館編集『五卅運動』第二冊、上海人民出版社一九九一年、二頁。以下の引用における（ ）内の文字はすべて筆者によって補足したものである。
- (3) 『警部日報』一九二五年二月十一日記事、上海市檔案館編集『五卅運動』第二冊、上海人民出版社一九九一年、二一三頁。
- (4) 『警部日報』一九二五年二月十二日記事、上海市檔案館編集『五卅運動』第二冊、上海人民出版社一九九一年、三三四頁。
- (5) 『警部日報』一九二五年二月十六日記事、上海市檔案館編集『五卅運動』第二冊、上海人民出版社一九九一年、十一十一頁。
- (6) 『警部日報』一九二五年五月十六日記事、上海市檔案館編集『五卅運動』第二冊、上海人民出版社一九九一年、七十四―七十五頁。
- (7) 『警部日報』一九二五年五月十八日記事、上海市檔案館編集『五卅運動』第二冊、上海人民出版社一九九一年、七十七頁。
- (8) 宇高寧『支那労働問題』、国際文化研究会大正十四年八月、六六四―六六五頁。
- (9) 同（8）、六六七頁。ちなみにいうと、前田愛氏は「SHANGHAI 1925」において、この内外綿会社の本社を「工場」と、各工場を「工場」というように表記しているが、本稿は前者を「会社」、後者を「工場」と表記することにする）
- (10) 前田愛「SHANGHAI 1925」（『都市空間のなかの文学』所収）
- (11) 同（10）
- (12) 同（10）
- (13) この点に関して、雑誌掲載のテキスト第六章「婦人―海港章―」第二節、初刊本・決定版の第四三節を参照。
- (14) 『東京百年史』によれば、昭和七年六月、日本全国的に思想運動取締強化のため、警視庁の官制を一部改め、新たに特別高等警察部が設置されることになった。いわゆる「特高」がそれであって、従来警視庁総監官房に属していた特別高等課と外事課を根幹として新設されたのである（東京百年史編集委員会編『東京百年史』第五卷「復興から壊滅への東京（昭和期戦前）」、東京都昭和四十七年、六七一頁版）。

- (15) 同(8)、六八五頁。
- (16) 「工部局巡捕房の巡查による五・三〇事件に関する報告」(愛活生…一九二五年五月三〇日、一九二五年六月二日)、上海市檔案館編集『五卅運動』第一冊、上海人民出版社一九九一年、二九六、二九七頁。
- (17) 「警務処巡捕房命令」(一九二五年五月二十六日)、上海市檔案館編集『五卅運動』第一冊、上海人民出版社一九九一年、三〇四頁。
- (18) 「工部局巡捕房の巡查による五・三〇事件に関する報告」(泰布倫…一九二五年九月二三日、一九二五年十月三日)、上海市檔案館編集『五卅運動』第一冊、上海人民出版社一九九一年、二九八、三〇二頁。「工部局警備委員会による総巡麦高雲と巡查愛活生などからの五・三〇事件に関する陳述の聴取會議記録」(一九二五年八月、十二月)、上海市檔案館編集『五卅運動』第一冊、上海人民出版社一九九一年、五二七、五五一頁。
- (19) 『上海』の序において、横光利一は「私はこの作を書かうとした動機は優れた芸術品を書きたいと思つたといふよりも、むしろ自分の住む惨めな東洋を一度知つてみたいと思ふ子供っぽい気持ちから筆をとつた。しかし、知識ある人々の中で、この五・三〇事件といふ重大な事件に興味を持つてゐる人々が少いばかりか、知つてゐる人々も殆どないのを知ると、一度この事件の性質だけは知つておいて貰はねばならぬ」と言っている。
- (20) 鄭超麟編述「帝國主義による上海市民への虐殺經過」(一九二五年)、上海市檔案館編集『五卅運動』第一冊、上海人民出版社一九九一年、二六九、二七〇頁。
- (21) 同(20)。
- (22) 同(20)。
- (23) 同(20)。
- (24) 『警部日報』一九二五年六月三日記事、上海市檔案館編集『五卅運動』第二冊、上海人民出版社一九九一年、一二三頁。
- (25) 『警部日報』一九二五年六月三日記事、上海市檔案館編集『五卅運動』第二冊、上海人民出版社一九九一年、一二四頁。